



埼玉県マスコット  
「コバトン」

# 令和7年産 水稻の作柄概況

埼玉県農業技術研究センター



## 1 気象概況

### (1) 気温

月平均気温は平年と比較して生育期間を通じて高かった。月別では、6～8月は熊谷地方気象台の観測史上1位となる記録的な高温であった。

### (2) 降水量

月合計は平年と比較して4、5月は多かったが、以降、少なく経過した。気象庁の発表（9月1日確定値）によると、関東甲信の梅雨入りは5月22日頃であり、梅雨明けは6月28日頃と、いずれも観測史上最も早かった。

### (3) 日照時間

月合計は平年と比較して4月は平年並、5、10月は少なく、6～9月は多く経過した。

### (4) 熊谷地方気象台の観測記録

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
平均気温	本年	15.3	19.1	25.2	29.1	30.1	26.2	18.5
	平年	13.9	18.8	22.3	26.0	27.1	23.3	17.6
	平年差	+1.4	+0.3	+2.9	+3.1	+3.0	+2.9	+0.9
	階級区分	かなり高い	平年並	かなり高い	かなり高い	かなり高い	かなり高い	高い
降水量	本年	121.5	181.0	113.5	125.5	46.5	149.0	64.5
	平年	90.7	115.1	149.5	169.8	183.3	198.2	177.1
	平年比	134%	157%	76%	74%	25%	75%	36%
	階級区分	多い	多い	少ない	少ない	少ない	少ない	少ない
日照時間	本年	199.3	153.0	173.9	241.7	229.7	165.5	104.0
	平年	197.1	192.0	133.9	146.0	169.3	131.6	144.1
	平年比	101%	80%	130%	166%	136%	126%	72%
	階級区分	平年並	少ない	かなり多い	かなり多い	多い	多い	少ない

＊熊谷地方気象台「埼玉県の気象・地震概況」より

### (5) 特徴的な気象と水稻への影響

特徴的な気象	水稻への影響
・5月下旬の低温寡照	・早期、早植栽培の生育抑制
・6月～9月の高温	・全作期の分けつ発生促進、葉位の進展
	・出穂の前進
	・全作期の葉色低下
・7月下旬～8月の最高気温35℃を超える高温	・全作期の白未熟粒の発生助長と登熟抑制
	・不稔籾の発生助長
・7月下旬～9月の多照	・全作期の登熟促進

## 2 水稻生育相調査から見た生育・作柄

### (1) 早期栽培（5月1日植 コシヒカリ）

移植時の苗の充実度はおおむね平年並であり、移植後は植え傷みもなく活着は良好であった。5月下旬の一時期を除き高温に経過したことから、分げつの発生は良好で低位低次の強勢茎が早期に確保された。移植後40日調査では茎数が平年比116%と多かったが、中干しが順調に実施できたことにより、過剰分げつは抑制された。その後の異常高温により肥料切れの症状も見られたが、強勢茎が多かったことから成熟期の穂数は平年比108%となった（図1、表3）。高温の継続により、葉位の進展や幼穂の伸長も進み、出穂はややばらついたが、出穂期は平年より5日早く、登熟も促進され成熟期は平年より7日早かった（表2）。

1穂籾数は平年比96%、 $m^2$ 当籾数は平年比103%となった。登熟歩合は平年より4.7ポイント低かった。登熟期間全般が高温であったため稲体の消耗は大きいと考えられるものの、倒伏が発生しなかったことや登熟期間が多照に経過したことから、千粒重は平年並、屑重歩合は平年より4.0ポイント低く、精玄米重は平年比99%であった（表4）。

玄米の外観品質は、乳白粒比やその他未熟粒比が平年より低いものの、登熟期間の著しい高温により胴割れ粒比や基部未熟粒比はそれぞれ3.0ポイント、14.9ポイント高く、整粒粒比は平年より5.2ポイント低かった（表5）。

### (2) 早植栽培（5月20日植 彩のかがやき）

移植時の苗の充実度は平年並であり、植え傷みもなく、活着は良好であった。生育期間を通じて高温多照で経過したことから、初期から旺盛な生育で推移し、最高茎数は平年比114%とかなり多かった。葉色は淡く肥料切れ気味に推移し、最高分げつ期以降の生育の凋落が大きく、成熟期の稈長は平年比91%、穂長は平年比95%、穂数は平年比100%となった（図2、表8）。

6月中旬以降の高温により葉位の進展は早く、主稈総葉枚数は0.7枚多かったものの、出穂期は平年より1日早まり、成熟期は平年より5日早かった（表7）。

高温の影響により肥料の消費が早かったことに加え、過剰分げつによって稲体の消耗が激しく、1穂籾数は平年比77%、 $m^2$ 当籾数は平年比79%となった。また、登熟期間を通じて多照であった一方、高温によって光合成産物の転流が抑制されたこと、最低気温が高く、呼吸量が増加したことにより、玄米の粒厚は薄く、千粒重は平年比89%、登熟歩合は平年より8.3ポイント低下し、精玄米重は平年比64%とかなり低収となった（表9）。

玄米の外観品質は、出穂後20日間の平均気温が30.3℃と白未熟粒が多発しやすいとされている27℃を大幅に上回り、白未熟粒が平年より大幅に増加したことや、白死米の多発（その他被害粒23.9%のうち、19.8%を占める）により、整粒粒比は4.7%となった（表10）。

### (3) 普通期栽培（6月25日植 彩のきずな）

移植時の苗の充実度は平年並であり、植え傷みもなく、活着は良好であった。移植以降、高温多照に経過したことから、生育初期から茎数は平年を大きく上回り、低位低次の強勢茎が早期に確保された。中干しが順調に実施できたことにより過剰分げつは抑制され、強勢茎が多かったことから成熟期の穂数は平年比116%となった（図3、表13）。

葉位の進展は早く、移植後40日調査時点において止葉の抽出が確認された。主稈総葉枚数は平年より0.6枚少なく、出穂期は平年より5日早く、累年史上最も早い8月12日となった。移植以降高温が継続したことに加え、幼穂形成期から節間伸長期となる7月第4半旬～8月第1半旬の平均気温が平年より2～4℃程度高かったことから幼穂の生育が促進され（移植後40日調査時点 幼穂長10.0cm（平年値1.8cm））、出穂が早まったと考えられる。出穂後も高温は継続し、成熟期は平年より6日早かった（表12）。

有効穂数は平年比114%と多く、1穂籾数は平年比95%であり、 $m^2$ 当籾数は平年比109%となった。また、千粒重は平年比99%、登熟歩合は平年より0.8ポイント増加し、精玄米重は平年比105%となった（表14）。「彩のきずな」は、早植「彩のかがやき」と

ほぼ出穂期・成熟期が同時期であり、同様に高温に遭遇したが、これは蒸散能力が高いなどの品種特性が発揮されたことにより、千粒重及び登熟歩合が平年並に確保できた。あわせて、普通期栽培は在ほ期間が短く、窒素の供給が途切れなかったことに多照傾向が加わり、茎数の減少が平年並、光合成及び光合成産物の転流が順調であったことからと考えられた。

玄米の外観品質は、出穂後20日間の平均気温が30.5℃と白未熟粒が多発しやすいとされている27℃を大幅に上回り、高温登熟性がやや強いものの、基部未熟粒が多発（平年差＋16.6%）し、整粒粒比は平年より10.6ポイント低かった（表15）。

### 3 県内全般の生育・作柄の特徴

関東農政局が11月18日に発表した10月25日現在の埼玉県の作況単収指数は、東部93、西部105、全体で96であった。一方で、県内各地の農林振興センターが設置する生育診断ほの収量や農業者等からの聞き取りでは、おおむね平年並～やや多収となっている事例が多い。実際の収量との差が大きい理由は、現在の作況の算出方法では予想収穫量は都県ごとに最も使用されている生産者ふるい目（1.8mm）以上で農産物規格規程三等以上の収穫量を対象としている。つまり、収穫物の中から整粒歩合が三等の規格に達するまで白未熟粒を除いたものの重量が統計上の収量となる。このため、高温障害により白未熟粒の多発した県東部では、実際の収量よりも作況が著しく低下することとなった。

農林水産省が11月28日に発表した10月31日現在の令和7年産米の農産物検査結果（速報値）では水稻うるち玄米の等級別検査結果（等級比率）は1等45.1%、2等38.0%、3等11.7%、規格外5.1%であった。格落ちの主な原因は形質（白未熟粒）、及び着色粒であるが、昨年発生が多かった斑点米カメムシ等の加害による着色粒の割合は下がり、白未熟粒の割合が増加している。

品種別検査結果は、「コシヒカリ」の1等比率は8月末で25.3%、9月末で16.4%、10月末で16.2%と昨年（8月末43.0%、9月末25.2%、10月末25.7%）に比べ低くなっている。

「彩のきずな」の1等比率は8月末で67.9%、9月末で67.9%、10月末で68.0%と安定して高い水準を保っている。

「彩のかがやき」は9月末には1等に格付されるものが無かったが、10月末の1等比率は25.1%となり、昨年同時期の14.0%を上回った。しかし、規格外は10月末で30.0%となり、異常高温年ではなかった令和2年から4年までの3か年平均の1.2%に比べ著しく高く、白未熟粒が多発した令和5年の33.7%と同程度となった。

また、昨年から銘柄検査が始まった水稻新品種「えみほころ」の1等比率は9月末で78.1%、10月末で80.2%と、「彩のきずな」を上回り高温登熟に強い特性が発揮された。

今年度も昨年、一昨年に引き続き登熟期が異常な高温で経過した。県内の多くの作型・品種で出穂後の20日間の平均気温が27℃以上の高温に遭遇したことから、白未熟粒の発生が助長され、外観品質を低下させる要因となった。

昨年多発生し大きな被害をもたらした「イネカメムシ」は、越冬世代成虫の6月末までの誘殺数が昨年と同等であったこと、7月中旬までの誘殺数が昨年同時期を大きく上回ったこと等により、病虫害発生予察注意報が2回発表された（7月3日、7月23日）。また、7月29日には「斑点米カメムシ類」の注意報を発表し、アカスジカスミカメ及びイネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等に対する警戒を呼びかけた。

県内各地でイネカメムシに対する防除を徹底したほ場では、第1世代以降の発生量は昨年に比べ減少し、「着色粒」による格落ちが大幅に減少するなど斑点米カメムシ類の吸汁による被害を抑制することができた。一方で、防除が徹底できなかったほ場では「着色粒」による規格外の発生が見られた。

近年、基肥一発肥料の普及や猛暑のため、7～8月にほ場での管理作業を見かけることが減っていたが、高温障害軽減のための追肥作業やイネカメムシ防除などの作業風景がよく見られるようになった。収量・品質の確保にむけ尽力されている様子がうかがえる。

6～8月の降雨が少なかったため、ため池を利用している地域の一部では用水が不足し生育に悪影響が生じた。また、野菜のかん水作業と競合する地域でも中干後に用水がひっ迫した。

#### (1) 早期栽培

米価高騰の影響もあり、早生品種の導入や田植開始時期が早まるなどの傾向が見られた。

田植作業は順調に進捗した。天候に恵まれ、苗の活着及び初期生育は良好であった。しかし、5月中旬から6月中旬にかけて低温寡照の影響から分げつの発生がやや緩慢となった地域も見られた。その後、気温は平年より高く、日照時間も多くなったことから生育は回復し、草丈は平年をやや上回り、茎数、葉齢はほぼ平年並、また、葉色がやや淡い傾向で推移した。出穂期は平年より5日程度早まった。7月末から極早生品種の収穫が始まり、その他の品種も平年に比べ5～7日程度収穫作業が早まった。

出穂後の気温が著しく高く、出穂後20日間の日平均気温が高く、白未熟粒などの高温障害発生の主な要因となった。収量は生育の全期間で高温多照であったことから平年並となったが、多くの地域で品質低下が見られた。

#### (2) 早植栽培

田植作業は順調に進捗した。5月中旬以降の天候不順の影響で、苗の生育や田植後の初期生育が緩慢となった地域も見られた。6月中旬以降、高温・多照に経過したため、生育は回復した。草丈は平年を上回り、茎数、葉齢はほぼ平年並となった。

7月、8月は高温多照となり、生育は草丈がやや高く、茎数、葉齢はほぼ平年並、葉色はやや淡い傾向が続いた。出穂期は平年より5日程度早まった。

出穂後も高温多照が続き、早期栽培同様に出穂後20日間の日平均気温が高く、高温障害発生の主な要因となった。

収量は高温多照であったことから平年並となったが、高温障害により多くの地域で品質が低下した。

#### (3) 普通期栽培

播種時期に天候不順に遭遇した場合には、一部で出芽遅延や苗立枯病の発生が見られた。

田植作業は順調に進捗し、苗の活着も良好で初期生育は順調であった。

麦あと栽培では降雨の影響で麦類の収穫が遅れたことから、田植作業に遅れが生じ、老化苗による初期生育の停滞が一部で見られた。また、高温の影響で田植直後から土壤還元（ガス沸き）が発生したため、活着不良や初期生育の停滞が著しいほ場が散見された。

7月は高温多照となり生育は旺盛で、茎数は多くなった。8月も高温多照が続き、出穂期・成熟期とも2、3日程度早まった。分げつ茎の凋落が少なかったため、穂数が多くもみ数も多くなったが、天候に恵まれ登熟は良好で、ふるい下米が多くなったものの、収量は平年並からやや多収となった。高温障害により品質の低下が見られたが、田植の遅い地域では少なかった。

※県内全般の作業の進捗状況、生育・収量は農業支援課調べ。

## 4 具体的データ

### (1) 早期栽培 (5月1日植 コシヒカリ)

表1 耕種概要

移植期	苗種類	施肥(kg/10a N)		
		基肥	移植後13日	出穂前16日
5/1	稚苗	3.0	2.0	2.5

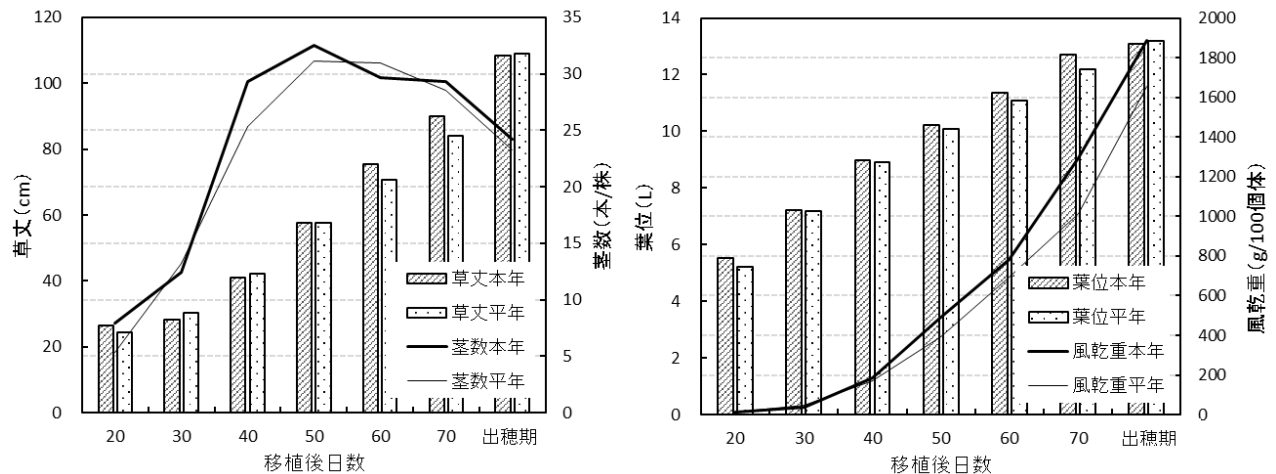


図1 生育経過

注) 平年値は平成11年～令和6年(平成22年は除く)の平均。以下同様。

表2 出穂・成熟期

出穂始(月日)			出穂期(月日)			穂揃期(月日)			成熟期(月日)		
本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
7/12	7/20	-8	7/20	7/25	-5	7/23	7/28	-5	8/27	9/3	-7

表3 成熟期調査

稈長(cm)			穂長(cm)			穂数(本/m <sup>2</sup> )			倒伏程度		
本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差
89.6	89.1	101	21.3	20.1	106	504	465	108	0.0	1.3	-1.3

注)倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階評価

四捨五入の関係で一致しない場合がある(以下同様)。

表4 収量及び収量構成要素

	精玄米重 (kg/10a)	屑重歩合 (%)	千粒重 (g)	有効穂数 (本/m <sup>2</sup> )	1穂粒数 (粒)	m <sup>2</sup> 当り数 (千粒)	登熟歩合 (%)
本年	534	7.4	20.4	475	84.9	40.3	64.5
平年	538	11.4	20.3	440	88.8	39.0	69.2
平年比(差)	99	(-4.0)	100	108	96	103	(-4.7)

注1)精玄米重は1.80mm篩選後の重量

注2)精玄米重、千粒重は水分15%換算値

表5 玄米の外観品質(粒数比)

	整粒	胴割れ	乳白	基部未熟	腹白	青未熟	その他	
							未熟	被害粒
本年	40.3	4.9	8.0	24.9	2.1	0.9	14.2	4.8
平年(H20～R6)	45.5	1.9	11.3	10.0	2.3	2.1	22.3	4.7
平年差	-5.2	3.0	-3.3	14.9	-0.2	-1.2	-8.1	0.1

注)外観品質はサタケ穀粒判別器による測定

(2) 早植栽培 (5月20日植 彩のかがやき)

表6 耕種概要

移植期	苗種類	施肥(kg/10a N)	
		基肥	出穂前24日
5/20	稚苗	5.0	3.0

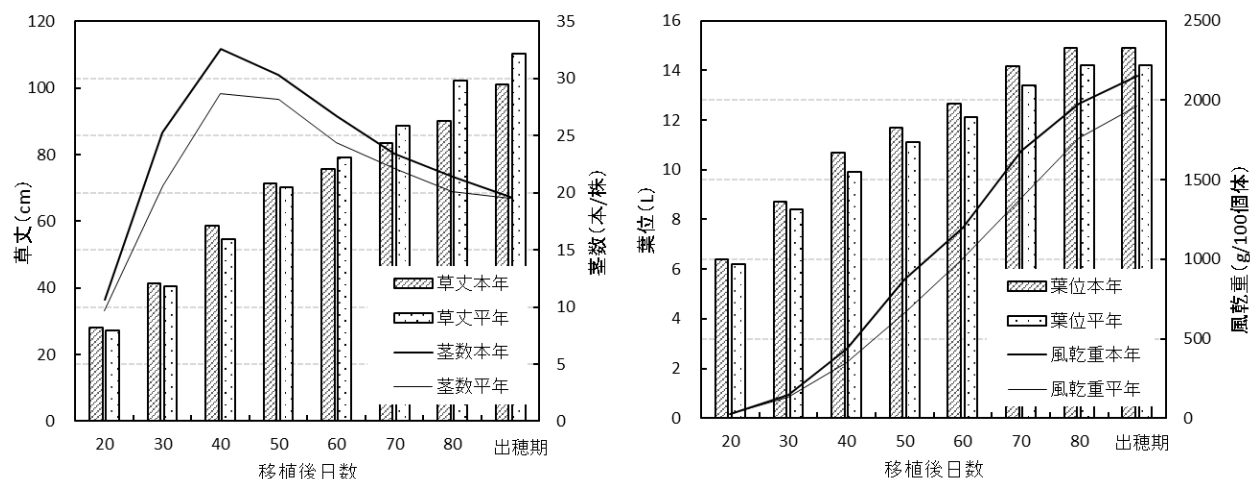


図2 生育経過

注) 平年値は平成12年～令和6年の平均。以下同様。

表7 出穂・成熟期

出穂始(月日)			出穂期(月日)			穂揃期(月日)			成熟期(月日)		
本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
8/10	8/9	1	8/11	8/12	-1	8/13	8/14	-1	9/22	9/27	-5

表8 成熟期調査

稈長(cm)			穂長(cm)			穂数(本/m <sup>2</sup> )			倒伏程度		
本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差
71.9	78.6	91	19.8	20.9	95	394	393	100	0.0	0.0	0.0

注)倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階評価

表9 収量及び収量構成要素

	精玄米重 (kg/10a)	屑重歩合 (%)	千粒重 (g)	有効穂数 (本/m <sup>2</sup> )	1穂粒数 (粒)	m <sup>2</sup> 当粒数 (千粒)	登熟歩合 (%)
本年	342	9.3	19.2	389	63.2	24.6	72.4
平年	535	7.3	21.5	379	82.1	31.1	80.7
平年比(差)	64	(2.0)	89	102	77	79	(-8.3)

注1)精玄米重は1.80mm篩選後の重量

注2)精玄米重、千粒重は水分15%換算値

表10 玄米の外観品質(粒数比)

	整粒	胴割れ	乳白	基部未熟	腹白	青未熟	その他	
							未熟	被害粒
本年	4.7	0.1	14.6	21.9	25.4	0.7	9.1	23.9
平年(H19～R6)	49.5	0.7	6.9	15.3	4.0	3.9	15.8	3.9
平年差	-44.8	-0.6	7.7	6.6	21.4	-3.2	-6.7	20.0

注)外観品質はサタケ穀粒判別器による測定

(3) 普通期栽培 (6月25日植 彩のきずな)

表11 耕種概要

移植期	苗種類	施肥(kg/10a N)	
		基肥	出穂前19日
6月25日	中苗	5.0	2.0

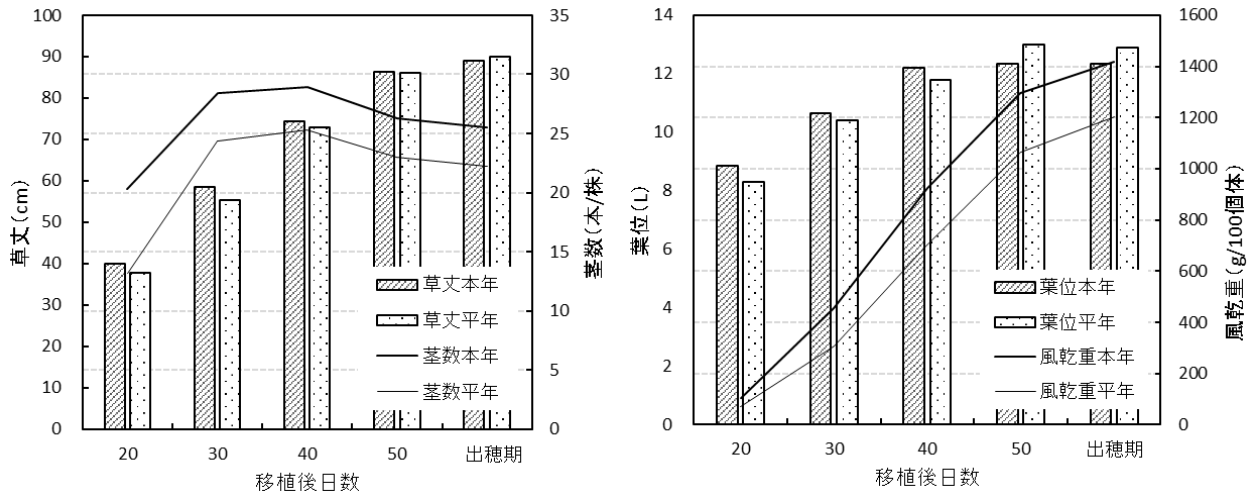


図3 生育経過

注) 平年値は平成27年～令和6年の平均。以下同様。

なお、平成30年、令和5年は出穂期がかなり早まったため、50日後調査データを除外。

表12 出穂・成熟期

出穂始(月日)			出穂期(月日)			穂揃期(月日)			成熟期(月日)		
本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
8/11	8/14	-3	8/12	8/17	-5	8/15	8/19	-5	9/24	9/30	-6

表13 成熟期調査

稈長(cm)			穂長(cm)			穂数(本/m <sup>2</sup> )			倒伏程度		
本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差
66.5	70.5	94	19.7	20.7	95	531	458	116	0.0	0.0	0.0

注)倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階評価

表14 収量及び収量構成要素

	精玄米重 (kg/10a)	屑重歩合 (%)	千粒重 (g)	有効穂数 (本/m <sup>2</sup> )	1穂粒数 (粒)	m <sup>2</sup> 当粒数 (千粒)	登熟歩合 (%)
本年	527	6.3	22.2	515	58.1	29.9	82.4
平年	502	7.6	22.4	453	60.8	27.5	81.6
平年比(差)	105	(-1.3)	99	114	95	109	(0.8)

注1)精玄米重は1.80mm篩選後の重量

注2)精玄米重、千粒重は水分15%換算値

表15 玄米の外観品質(粒数比)

	整粒	胴割れ	乳白	基部未熟	腹白	青未熟	その他	
							未熟	被害粒
本年	60.9	0.5	5.1	19.6	1.8	0.5	9.6	2.4
平年(H27～R6)	71.5	3.7	4.1	3.0	1.5	1.9	10.2	4.2
平年差	-10.6	-3.2	1.0	16.6	0.3	-1.4	-0.6	-1.8

注)外観品質はサタケ穀粒判別器による測定

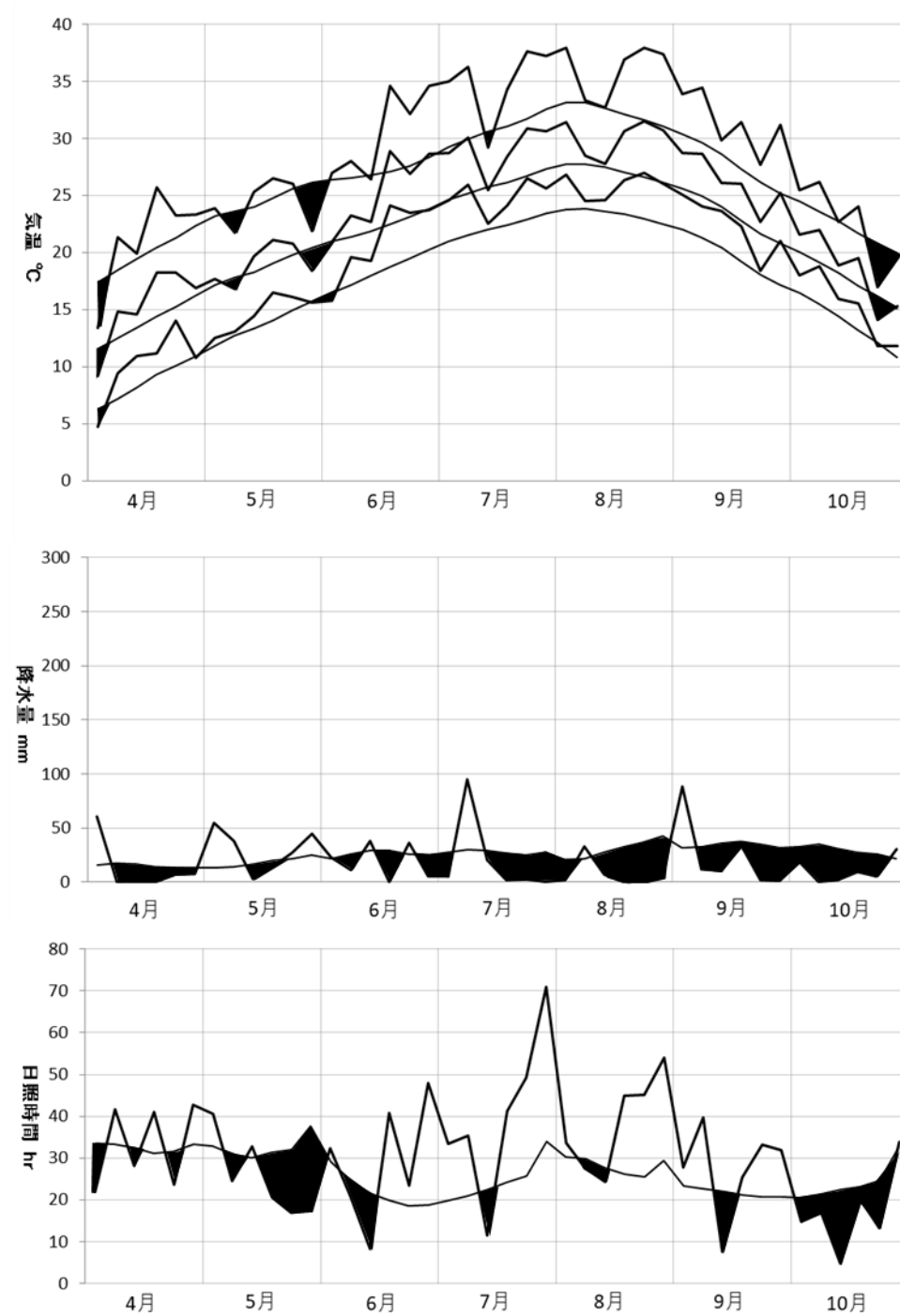


図4 令和7年夏作期間気象図

(熊谷気象台日別測定値から作成)